

特集

この本と私



「新編・銀河鉄道の夜」

宮沢 賢治 著

この物語を、初めて最後まで読みました。何度か手に取るけれど、いつも途中で投げ出して……。今回もまた、なかなか読み進むことができませんでした。どうしてだろう？ そんなに難しい文章ではないし、表現はとても美しい。例えば、「月長石で刻まれたような美しい紫のりんどうの花」や「水素よりももっと透き通った銀河の水」。冷たい水の上をさらさらと流れるような言葉たち。読み進めていって、やっと理由がわかった。温度が低いんだ。そして「さびしい」。この温度の低さと、作者の描く「さびしさ」を受け入れられなかったから、読破できなかったのだと思う。なぜなら、この銀河鉄道は死者を天上へと運ぶ列車なのだから。主人公のジョバンニは銀河鉄道に乗って、楽しい夢の旅をするわけではない。そして死者の中にはジョバンニの友人、カムパネルラも含まれている。二人は「本当の幸いとは何か」を常に問うている。いつも、誰かの幸せのために何かをしたいと切望している。でも、誰かを幸せにするには、まず自分が幸せであることだ。自分が「幸せ」な状態を知らなければ、誰かを幸せにすることはできない。そして「幸せ」は大層なモノばかりではなく、心がポツと暖かくなる瞬間に生まれて、そんな小さな幸せをたくさん知ることが大きな幸せへの一歩になると思う今日この頃です。

佑起子



新潮文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞